

## 鷗外生誕一六〇年・没後一〇〇年

館長 今川 英子

昨年から今年にかけて開催した「詩の水脈―北九州 詩の一〇〇年」展は、この街での詩活動を日本の近代詩史のなかで体系化しようとする試みでした。それは地域の文学館としての役割（郷土ゆかりの文学者や文芸活動の資料収集・保存・調査・研究によって地域固有の歴史、風土、文化を再発見し、街の格と誇りを醸成、地域文化の向上と活性化に寄与する。）を真つ当に担うもので、スタッフ一同、気概を持って取り組みました。でも新しい発見はあるものの市井の人々が同人誌に発表した詩が主で、地味な展示になるはずでしたので入館者数は期待しませんでした。ところが開けてみると徐々に入館者は増えていき、しかも若者が多く、滞留時間が長いのです。著名な詩人による詩ではないのですが全文を掲げた詩の前で読みいつています。アンケートには、「ひさしぶりにうつくしい言葉に触れ、身体が水を飲むように生き返る気がした」（20代）とあります。真摯に紡がれた言葉が若者の渴いた心を慰めたのでしょうか。あるいは言語を超えて響く何かがあったのでしょうか。

私は誤解していたのかもしれない。最近はとみにいらだちやささくれ立つ気持ちをとげのある言葉でツイートする表現が目につき、推敲のいとまもなく交わされるメールの単純な表現に言葉の貧困が助長され、自戒も含めて日本語のこれからを憂えていました。ところがそれは誰しも痛感していたことで、実は美しい深い言葉や含蓄のある表現を希求していて、それはとりもなおさず他者とのこころの触れ合いへの渴望だったのではないかと。

会期中に開催された四名の詩人のご講演は、

聴衆の数は制限されたものの対面で行われました。言葉の一つ一つが心地よく心に届き、刺激的でもありませんが、それは言葉の持つ力だけではなかったように思われます。講演する詩人の方々の表情やしぐさ、詩性、声、つまりは言葉の意味だけではなく抑揚や話し方で、言葉以上に様々なニュアンスと魅力と温もりを伝えていたのです。言葉のやりとりがいかに多様であるかを改めて教えてくれました。

ところで今年は森鷗外（一八六一―一九二二）生誕一六〇年、没後一〇〇年、さらに小倉を離任して二〇年の記念すべき年です。六〇年の生涯で住んだところは、生誕地津和野、留学先ドイツ、東京観潮楼、そして転勤先の小倉です。小倉には第十二師団軍医部長として一八九九年六月十九日に赴任、一九〇二年三月二十六日に小倉停車場を発つまで二年一〇カ月を過ごしました。それは常々、左遷による失意のものと云われがちですが、むしろ逆境を乗り越えて人として磨かれ、後の豊穣を培ったと捉える重要な時間でもありました。勤務に精励する傍ら、小説は書きませんでした。九年をかけた「即興詩人」の完訳などの翻訳や新聞への寄稿のほか、史跡調査や資料の収集は後年の歴史・史伝小説へと反映されました。一方で重工業都市として発展する北九州の黎明期に多くの影響をもたらしました。

この機会に、小倉時代を活写する小説や日記を収めた『文学館文庫⑦』（再刊）や評論・書簡等を収めた『同⑬』をお読みいただくと、鷗外に関心をお寄せいただければ幸いです。

## 目次

○ 巻頭コラム「鷗外生誕160年・没後100年」…………… 1	○ 〈共催〉「文学と書の融合 一筆に想いをたくして―」展
○ 第30回特別企画展「詩の水脈―北九州 詩の100年―」… 2~4	○ 〈共催〉日本現代川柳作家展
○ 第8回林芙美子文学賞表彰式…………… 5	○ 〈九州文化協会主催、文学館共催〉九州芸術祭 文学カフェ in 北九州
○ 東アジア文化都市北九州2020▶21	○ 文学館文庫
東アジア文学会議2021、アートシネマ	○ 「北九州市立文学館紀要」第4号刊行
○ 第13回子どもノンフィクション文学賞…………… 6	○ 展覧会予告…………… 8
○ 第12回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール	第31回特別企画展 かいけつゾロリ大冒険展
○ 天変地異と文学―3・11からコロナ禍まで…………… 7	祈りの軌跡・藤原新也展
	○ お祝い、お悔やみ
	○ 寄贈者・提供者、提供雑誌



北九州文化都市 北九州国際大会 SUSTAINABLE GOALS DEVELOPMENT

北九州市立文学館 第30回特別企画展

# 詩の水脈

北九州 詩の100年

生まれ、変わり、未来へ。

北九州地域における一〇〇年を越える詩の歴史。大正の黎明期から盛衰を繰り返しながら、未来へ流れる詩の水脈を、皆中とともに紹介します。

2021年 10月23日(土) ▶ 2022年 1月30日(日)

開館時間 9:30~18:00 (入館は17:30まで)  
休 日 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始(12月29日~1月3日)  
観 覧 料 一般500(400) 中高生半120(90) 小学生半60(40)  
※(1)市内30人以上の団体料金  
○障害者観覧料減額:身体障害者手帳提示者、精神障害者保健福祉手帳提示者及び付添人(身体障害者の方の付添人は入館時に申請書提出)  
○公的機関が発行人の北九州市、福岡市、熊本市、鹿児島市の65歳以上の市民であることを確認できる証明書提示者の割引は2割

主催:北九州市立文学館  
後援:朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、読者新聞社、NHK北九州放送局、RKB毎日放送、九州朝日放送、TNCテレビ西日本、FBS福岡放送、テレビQ、CRUISE FM、イベント力、福岡県民会、常任委員会の会、(公)北九州市立文学館文化振興財団

北九州市立文学館  
KITAKYUSHU LITERATURE MUSEUM

昨春秋は30回目の特別企画展として、「詩の水脈—北九州 詩の一〇〇年—」を開催しました。明治期に遡る日本の近現代詩、北九州におけるその誕生と発展、現在までを通観する展覧会となりました。

### 〈展示構成〉

#### Chapter1 「黎明と隆盛」

『新体詩抄』に始まる日本の詩史を大正期、萩原朔太郎まで辿り、この時期に生まれた、北九州初の詩誌とされる「びろうど」を紹介しました。その後、昭和初期に迎えた隆盛期に、東瀧、越智弾政らの詩人によって出版された同人詩誌を多数展示しました。

#### Chapter2 「衰退と復興」

戦時下に入り、統廃合によって全国的に詩誌の数は減り、北九州でも発表の場は限られました。北九州詩人協会が一九四三年に刊行した夢野文代ら六人の詩集などを展示。また敗戦の三か月のちに刊行された詩誌『鵬(FOU)』「浪漫」などを紹介しながら、戦後の文芸復興の歩みを辿りました。

#### Chapter3 「再びの隆盛へ」

一九五〇〜六〇年代、北九州の詩壇は活況を呈しました。一九五二年に創刊された「沙漠」は五号から参加し、長く代表を務めた麻生久のもとで多くの詩人を輩出し、二〇一五年まで半世紀を超えて二七七号まで刊行された北九州を代表する詩誌でした。本章では「沙漠」や同時代の詩誌のほか、この

時代にデビューした宗左近、多田智満子、高橋睦郎らゆかりの詩人たちの資料を展示しました。

#### Interlude 「労働と詩」

北九州の企業、職場内で刊行された職場雑誌の詩を紹介しました。八幡製鉄所の「製鉄文化」、門司鉄道局の「門鉄文化」や、海員など海を職場とする人たちが作られた「繫留索」のほか、筑豊を始めとする炭坑で作られた雑誌などを展示しました。

#### Chapter4 「詩のつなぐ力」

七、八〇年代から現代までの詩の状況を詩集、詩誌を展示し、紹介しました。平出隆がデビューした七〇年代、八〇年代は詩の全盛期でした。以降、徐々に下火になりながら、インターネットなど新たな媒体で詩作は行われました。現在も同人誌、ウェブなど媒体はさまざまですが、詩は脈々と書き続けられています。

(展示資料点数 約200点)

#### アンケート

脈々と流れる「詩の水脈」を観ることができ、大変良かったと思います。地元北九州の文学、詩の歴史が良く分かりました。

(50代・若松区)

ひさしぶりにつくつくしい言葉に触れ、身体が水を飲むように生き返る気がしました。(20代・京都府)

## 開会記念講話

二〇二一年一月二三日

「詩の水脈」展の開会を記念し、詩人の岡田哲也さんに「詩の現在と日本語の水脈」と題して講話をいただきました。

岡田さんは西日本新聞の「西日本詩時評」を三〇年に渡って執筆されていますが、評論という感覚ではなく、一人の人間の言葉を、一人の人間として受け取ったものとして書いてこられたそうです。国や地域といった場所、空間ではなく、人同士の「つながりたいたい」という思いがあり、それがうまくできないから書く、とも話されました。

また肉声で読むことが大事で、宮沢賢治の詩を例に、「心の井戸」から汲み上げたときの言葉、その「色」が声に表れることを説かれました。

詩を書くとき、他の誰でもない自分から湧き出る言葉を、自分に近い人々に届くように、難しい言葉ではなく、やさしい言葉で書くことを心がけていることをお話されました。

途中にはご自身の詩を朗読され、岡田さんの想いと言葉が充ち溢れる講話となりました。



岡田哲也さん

## アンケート

・ 詩人ご本人の朗読はゆつくりしっかり言葉が伝わってきて素晴らしい。詩は音にして読んでこそ完成する。深くつなずきました。

(30代・八幡西区)

## 高橋睦郎さん講演会

### 「今、詩と向きあひつ」

二〇二一年二月四日

八幡生まれで、少年、青年期を門司で過ごされた詩人の高橋睦郎さんにご自身の生い立ちから現在に至るまでの、詩との出会いと営為、そして現在の詩作についてのお話をいただきました。

生後すぐに父を亡くし、幼時には母が睡眠薬で一家心中を図ったが助かったこと、小中学時代の友人、先生との出会い、大学時代に結核を患ったことで教師の道が閉ざされたことなどを挙げられ、出会いと格差社会が自身を詩に導いたとお話されました。

また北九州の詩誌「沙漠」に入り、掲載された詩が、「詩学」の月評で川崎洋に絶賛されたことが上京のきっかけとなったそうです。上京後は三島由紀夫の知遇を得、親しく付き合ったが、その死後、書いても手ごたえを得られない「大スランプ」に陥ったといえます。その後、交通事故、東日本大

震災をきっかけに古代ギリシャと向き合い始めたそうです。それを経て、日本の詩の歴史に向き合い、自身を巫として歴史上の詩人が一人語りをする近著「深きより」を刊行。現在はそれを世界全体に広げ、高橋さんが世界の詩人に問いかける連載詩を手がけていることをお話いただき、講演の終わりに

は、その一編「愛する罪ゆえ ダンテ・アリギエリへ」を朗読していただきました。

質疑応答では会場から多くの質問が寄せられ、門司への想いについて尋ねられ、詩には遠くの間が必要で、門司という港町には、別の世界があるという感覚があり、「門司は詩の原点」と答えられました。



高橋睦郎さん

## アンケート

・ 高橋先生の様々な人々の出会いのお話が大変興味深く、面白く、自分の出会いを振り返るいい機会となりました。

(40代・小倉南区)

・ 朗読、心に刻まれました。お人柄が魅力です。詩をたくさん読んでみたくまりました。

(80代・若松区)

## 平出隆さん講演会

### 「本は葉書／葉書は本」

#### 「詩の新しい探究」

二〇二一年二月二日

「本」とは何かという探究を続けてきた平出さんが、「葉書」をキーワードに自身の試みについて話されました。

親交のあった装幀家・菊地信義、編集者・長谷川郁夫、架空の国々の切手を描き続けた画家・ドナルド・エヴァンズ、現代美術家・河原温などの話を織り交ぜ、これまでに手がけた「版行」や展覧会について紹介されました。

平出さんは、「葉書で」書いたものを誰かに届けるという関係は、文学にとって根源的なものなのにそれを忘れてしまっている」と考え、「葉書は2頁の本」だとして「private print postcard」(通称 pripo / ププリポ)というかたちで表現、「実践によって広めよう」と話されました。

また、展覧会を「展覧会という形式の本」と捉えた「AIRPOST POETRY」展、「Air Language 空中の本へ」展などを開催。二〇二〇年には、多摩美術大学での最終講義自体を展覧会として行ったことなどを紹介されました。



平出隆さん

## アンケート

・詩のお話にとどまらず、本やそれ以前の世界の展開をとっても興味深く聞かせていただきました。  
 ・大変刺激的で面白いお話でした。現代の芸術的ヒントが詰まっている講座でした。(70代・戸畑区)

## 伊藤比呂美さん講演会 「今までになく 詩に向き合っています」

二〇二一年二月一日

伊藤比呂美さんは半生を振り返りながら話し始められました。学生時代に詩の翻訳を手伝い、自分でも書いてみたいと思ったのが詩との出会いです。妊娠・出産は興味深い体験でしたが、育児のストレスも含めて詩にしたとき「初めて自分の言葉で書くことができたと感じた」と話されます。

四十代で渡米した折には、日本語が使えない環境に詩人として苦しい思いをされました。ほどなく日本の新聞の人生相談欄を担当することになり、読者の相談文を読み、生きた言葉に触れた思いがしたとおっしゃいます。

帰国後、早稲田大学で詩を教えた三年間を「人生最良の楽しい時間だった」と振り返られます。詩が大好きで少しずつ上手くなっていく学生たちが可愛くてたまらない。なんとか世に出してあげたいと思っていたところ、教壇に

立つ旧知の詩人たちも同様に感じていたことがわかります。ならばと皆で雑誌や叢書を立ち上げる過程で、改めて「詩って楽しい」「詩をやってみてよかった」と感じられたそうです。  
 両親と夫の介護で日米を往復していた数年間、死について考えた伊藤さんは、お経に関心を深めます。講演の最後は自ら現代語訳された般若心経の一節を朗読されました。釈迦が弟子シャーリプトラに話し掛けるような滑らかな語り口に、聴衆は聞き入りま



伊藤比呂美さん

## アンケート

・学生の話をしているときとても嬉しそうでした。□から出てくる言葉全てが詩に聞こえました。力強い朗読に心が震えました。

(30代・福岡市)

朗読を生で聞けて幸せでした。ありがとうございました。詩について考えたいと思います。詩も書きたいと思いました。

(60代・小倉北区)

## 文学講座

大川内夏樹さん(九州共立大学講師)

「詩誌『鵬』の位置づけについて」

二〇二一年一月二十四日

「鵬」は戦後すぐの一九四五年十一月に北九州で刊行された戦後最初の詩誌です。本講座では執筆陣が戦前から東京をはじめとする他地域で活動し、モダニズム詩の流れと深く結びついており、「鵬」の詩史における重要性が時期的なことだけでなく、執筆陣にあったことなどをお話いただきました。

加藤邦彦さん(佛教大学教授)

「『炎える母』以前の詩人宗左近」

二〇二一年一月十四日

『炎える母』は、宗左近が空襲で母を喪つたことを書いた代表作です。本講座では、『炎える母』以前の宗の詩作における試行錯誤や、同時代に発表された野坂昭如「火垂るの墓」と比較しての戦争体験の「フィクション化」などについてお話をいただきました。(宗左近・花の会主催)



大川内夏樹さん



加藤邦彦さん

## 北九州同人誌詩の アンソロジーを読む

二〇二一年一月三日

「詩の水脈」展に合わせ、福岡県詩人会主催で詩の朗読会が開催されました。「沙漠」や「たむたむ」など、北九州で発行された詩誌に発表された詩38編を、表現集団「どんがら」の皆さんが朗読され、詩が充溢するひと時となりました。

## リーディング公演 詩×演劇『炎える母』

二〇二一年一月二十七日

東アジア文化都市北九州2020 2021「詩、踊る」関連企画として、宗左近『炎える母』のリーディング公演が、北九州芸術文化振興財団の主催で開催されました。演出を守田慎之介さん(演劇関係いすと校舎)が手がけ、有門正太郎さん(有門正太郎プレゼンツ)、寺田剛史さん(飛ぶ劇場)が出演。声と動きで立体的に立ちあがる本公演は、読書とはまた違う詩的体験となりました。終演後は守田さんと当館学芸員によるアフタートークも行われました。



有門正太郎さん



寺田剛史さん

提供：北九州芸術劇場

## 第8回林芙美子文学賞表彰式

二〇二二年二月二六日

第8回林芙美子文学賞の表彰式を、オンライン開催しました。この様子は、YouTubeの北九州市立文学館公式チャンネルでライブ配信しました。

全国から寄せられた395編の応募作品の中から、東京都在住の小泉綾子（こいずみ あやこ）さんの「あの子なら死んだよ」が佳作に選ばれました。（大賞については今回は該当作品なし）

表彰式には最終選考委員である井上荒野さん、角田光代さん、川上未映子さんもオンラインで参加されました。

佳作受賞の小泉さんは、「誰が自分の能力を最初に認めてくれたかは、人生の中ですごく重要で影響力のあることだと思っていて、この文学賞で認めてもらえたことがすごく嬉しいし、これからの自分がここで大きく変わっていくんだらうなと思っている。これから迷ったときは今日のことを思い出して、これからも書くことに挑戦し続けていきたい」と語りました。

最終選考委員からは、「タイトルがすばらしい」「言葉に対するセンスがある」「リズムミカルで声を持っている小説だと思うので、これからどんどんこの勢いで書き続けてほしい」などの選評をいただきました。

また、これから林芙美子文学賞に応募される方に向けては、「小説らしく

しようと思わないで、自由に書いてほしい」「何で今自分がこれを書かないといけないのかを常に考えて書いてほしい」「楽をしないで、覚悟を持って、ここでしか書けないものを信じて書いてほしい」などのアドバイスをされました。

選評や佳作作品は、「小説トリック」2022年春季号（朝日新聞出版）に掲載されました。

どうぞお手にとってお読みください。



オンライン表彰式の様子

## 東アジア文学会議2021

二〇二一年九月二〇日

「東アジア文化都市北九州2020」の一環として、「東アジア文学会議2021」（一般社団法人日本ペンクラブ企画監修）が北九州国際会議場で開催されました。

北橋健治北九州市長の開会挨拶に続き、第一部として浅田次郎さんが「これまででの文学 これからの文学」と題してコロナ禍での文学について基調講演を行いました。

第二部は俳句朗詠劇「翔べ久女よ！ 天空の果てまで」。中村敦夫さんが脚本・演出を手掛け、樋口一葉・与謝野晶子と並ぶ文学者として杉田久女を描きました。神田松鯉さん・中井貴恵さんが演じられました。

第三部は文学シンポジウム「地球を聴く〜持続可能性と文学ができること」。桐野夏生さん、村田喜代子さん、平野啓一郎さん、吉岡忍さん、田原さん、きむ ふなさんがパネリストを、佐藤アヤ子さんが司会を務め、社会の変容と文学の可能性について意見が交わされました。中国出身の田さん、韓国出身のきむさんは、コロナ禍における中国・韓国の文学者の活動について語りました。

最後に、東アジア文化都市北九州ディレクターを務めた今川英子文学館館長が閉会挨拶を行いました。このシンポジウムは後日インターネット配信もされました。

## 東アジア文化都市北九州 2020 ▶ 21

### アートシネマ

二〇二一年一〇月二日〜一月五日

北九州ゆかりの作家の映画化作品・計二一作品が上映されました。

小倉昭和館では、新田あわせ二〇作品が五週にわたり上映されました。作品は次のとおり（上映順）。（内は原作作家）。「無法松の一生」（岩下俊作）、「八月の狂詩曲」（村田喜代子）、「放浪記」（林芙美子）、「山椒大夫」（森鷗外）、「人のセックスを笑うな」（山崎ナオコ）、「クワイエットルームにようこそ」（松尾スズキ）、「ルート225」（藤野千夜）、「トワイライトささらさや」（加納朋子）、「サッドヴァケイション」（青山真治）、「百万円と苦虫女」（タダユキ）、「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」（リリー・フランキー）、「東京難民」（福澤徹三）、「復讐するは我にあり」（佐木隆三）、「砂の器」（松本清張）、「閉鎖病棟 それぞれの朝」（帯木蓬生）、「共喰い」（田中慎弥）、「日本侠客伝 花と龍」（火野葦平）、「蝸ノ記」（葉室麟）、「居眠り磐音」（佐伯泰英）、「マチネの終わりに」（平野啓一郎）。期間中、村田喜代子さん、福澤徹三さんによるトークイベントも行われました。

また、劇作家・伊馬春部原作の「まらそん侍」は、生家近くの長崎街道木屋瀬宿記念館で上映が行われ、地元の人たちが多く訪れました。上映前には伊馬の親族・梅本静一さん、『やさしい昭和の時間―劇作家伊馬春部』の著者・棧比呂子さんのトークイベントが開催されました。

## 第13回子どもノンフィクション文学賞

二〇二二年三月一九日

日本人学校中等部。

子どもノンフィクション文学賞の表彰式が開催されました。コロナ禍にもかかわらず小学生の部は342作品、中学生の部は428作品、計770作品の応募がありました。

表彰式は、3人の最終選考委員にも出席いただきオンラインを併用して無事に行うことができました。「受賞者のことば」では受賞された皆さんの気持ちを直接聴くことができました。ちよつと緊張した面持ちでしたが、堂々と発表していただきました。

### 受賞者 小学生の部 (敬称略)

大賞 川名蒔子 (埼玉県さいたま市立尾間木小学校) 佳作 本多祐実香 (北海道安平町立追分小学校) 齋藤宣人 (東京都暁星小学校) 選考委員特別賞 青木龍之介 (北九州市小石小学校) チャケ・レオン (Tokoh-Fuggar-Gymnasium) 田村萌梨 (鳥取県鹿野学園)、学校賞 北九州市立浅川小学校、東京学芸大学付属大泉小学校、横浜市立長津田小学校

### 受賞者 中学生の部 (敬称略)

大賞 座間耀永 (東京都青山学院中等部) 佳作 井口穂香 (新潟県上越教育大学附属中学校) 石川照葉 (大阪府堺市立三国丘中学校) 選考委員特別賞 國丸祐司 (飯塚市立筑穂中学校) 小山公也 (ペンネーム) (岩手県)、林翠恋 (新潟県上越教育大学附属中学校)、学校賞 飯塚市立筑穂中学校、大阪府立富田中学校、シンガポール



これまで当文学賞にご尽力いただいた那須正幹さんにかわり、今回から児童文学作家のあさのあつこさんが最終選考委員にご就任くださいました。

### あさのあつこのプロフィール

岡山県美作市生まれ。青山学院大学卒業。岡山市にて小学校の臨時教諭を務めたのち、作家デビュー。「バツテリー」で第35回野間児童文芸賞受賞。「バツテリー」全6巻で第54回小学館児童出版文化賞受賞。『たまゆら』で島清恋愛文学賞受賞。著書に「No.6」シリーズ、「THE MANZAI」シリーズ、「グリーン・グリーン」「烈風ただなか」「白兔」シリーズなど多数。

## 第12回「あなたにあって生まれた詩」コンクール

二〇二二年二月二日

受賞者 中学生の部 (敬称略)

北九州市立文学館では、北九州市出身の詩人 宗左近、みずかみかずよを顕彰するとともに、子どもの豊かな表現力を伸ばすことを目的に、「あなたにあって生まれた詩」コンクールを、実施しています。

第12回目を迎える今年度は、北九州市内外から小学生の部に208作品、中学生の部には1305作品の応募があり、詩人の平出隆さんの最終審査により各受賞者が決定しました。

今回は、特別企画展「詩の水脈 北九州 詩の100年」開催中の表彰式となり、参加された皆様には未来へとつながっていく「詩」の世界をより感じていただけたと思います。

このコンクールは次回も開催予定です。小中学生のみなさんのご応募を心よりお待ちしております。

### 受賞者 小学生の部 (敬称略)

宗左近賞 芳賀董 (国府台女子学院小学部) みずかみかずよ賞 野入桃子 (明治学園小学校) 北九州市長賞 高岩智志 (敬愛小学校) 北九州市教育長賞 能美にな (明治学園小学校) 北九州市立文学館長賞 大西月愛 (京都教育大学附属京都小中学校) 佳作 10名、学校賞 北九州市立大里小学校、京都教育大学附属京都小中学校



宗左近賞 近藤聖真 (北九州市立東郷中学校) みずかみかずよ賞 白田姫菜 (さつま町立宮之城中学校) 北九州市長賞 奥本響子 (北九州市立白銀中学校) 北九州市教育長賞 新生莉代 (九州国際大学付属中学校) 北九州市立文学館長賞 水流輝美 (指宿市立山川中学校) 佳作 10名、学校賞 指宿市立山川中学校、北九州市立白銀中学校



# 祈りの軌跡・ 藤原新也展



藤原新也（一燈照隅万燈照界） ©Shinya Fujiwara

2022年9月10日(土)～11月6日(日)

会場／北九州市立美術館分館 北九州市立文学館

## 第31回特別企画展



©原ゆたか/ポプラ社

北九州にゾロリせんせがやってくる!

# かいけつゾロリ



# 大冒険展

2022年7月16日(土)～8月31日(水)

### お祝い

・村田喜代子さん（作家）が、「姉の島」で第49回泉鏡花賞を受賞。  
・ペアーテ・ヴォンデさん（元ペルリン森鷗外記念館副館長兼キュレーター）が、令和3年秋の外国人叙勲 旭日双光章を受賞。  
・高橋睦郎さん（詩人）が、第63回毎日芸術賞を受賞。  
・五木寛之さん（作家）が、日本芸術院会員に選出。  
心からお祝い申し上げます。

### お悔やみ

・瀬戸内寂聴さん（作家）  
二〇二一年一月九日にご逝去、99歳。  
・宮崎路彦さん（歌人・柳原白蓮長女）  
二〇二二年一月二〇日にご逝去、96歳。  
・椎窓猛さん（詩人）  
二〇二二年一月二七日にご逝去、92歳。  
・八田昂さん（岩下俊作ご子息）  
二〇二二年三月一四日にご逝去、82歳。  
・青山真治さん（映画監督・作家）  
二〇二二年三月二一日にご逝去、57歳。  
心よりお悔やみを申し上げます。

### ■ 寄贈者・提供者

朝日新聞出版、朝比奈秋、有川公一、栗谷さやか、伊熊克美、一条真也、井上靖記念文化財団、後銀作、遠藤周作文学館、大阪俳句史研究会、大坪桂子、海外子女教育振興財団、花衣沙久羅、神奈川近代文学館、鎌倉文学館、川崎市市民ミュージアム、橄欖社、菊池寛記念館、北九州市立大学、北九州中小企業団体連合会、北九州文化連盟、九州大学日本語文学会、九州文化協会、

### ■ 提供雑誌

藍、青嶺、馬酔木、阿蘇、花鶏、穴生文芸、あん、絵合せ、沖、海峽派、GAGA、鯨々、玄海、自鳴鐘、書馨、scripta、青穂、川柳くろがね、川柳マガジン、空、第八期九州文学、小さい旗、天籟通信、新壘、虹野、浜木綿、ふよう、ぼち袋、むらさき、八雁、遼、鄰、りんどう

2022年3月31日発行

## 北九州市立文学館

〒803-0813  
北九州市小倉北区城内4-1  
TEL 093-571-1505  
<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

### ■ 開館時間

9:30～18:00（入館は17:30まで）

### ■ 休館日

毎週月曜日（月曜日が休日の場合は翌日）  
年末年始